

『中観明』における Karmadhāraya 解釈の 勝義の位置付け

林 玄 海

1. 序論

中観派の二諦説は、ナーガールジュナ (Nāgārjuna, ca. 150–250) が『中論』(*Mūla-madhyamakakārikā*) に提示した勝義 (paramārtha), 世俗 (saṃvṛti) の解釈を巡り展開した思想である。その勝義は、本来言語表現できない勝義を如何に説明するかが問題となり、戯論を離れた第一義的な勝義と、言語表現されるが勝義に相応する (paramārthānukūla) 第二義的な勝義を設定する。また、勝義は複合語解釈でも説明され、その二種類の勝義と関連付けられる。後期中観派のカマラシーラ (Kamalaśīla, ca. 740–795) も『中観明』(*Madhyamakāloka*) で勝義をそのように説明する。

カマラシーラの二諦説を扱うこれまでの研究は第一義的な勝義の主体を明確に提示してこなかった。したがって、本研究では Karmadhāraya 解釈で説明される勝義を (1) 対象と (2) 主体の両面から見直し、『中観明』における第一義的な勝義に何が該当するかを検討する。

2. 先行研究の指摘

カマラシーラの設定する勝義を詳細に考察する先行研究である森山 [1991a] を概観する。『中観明』では勝義を「真実を特徴とする勝義」と「智を本体とする勝義」の二種類設定し、前者を第一義的な勝義、後者を第二義的な勝義とする。次に、複合語解釈した勝義を上記の二種類の勝義と関連付け、Karmadhāraya 解釈の勝義を初地以上の「瑜伽行者の直接知覚」(yogipratyakṣa) による直観の内容、Tatpuruṣa 解釈の勝義を「瑜伽行者の直接知覚の対象領域」とし、以上を第一義的な勝義とする。さらに Bahuvrīhi 解釈の勝義である「勝義に相応するもの」として、「三慧」、了義として説かれる「不生」、正しい認識手段 (pramāṇa) 特に推理 (anumāna) を挙げ、第二義的な勝義とする。

3. 『中観明』における第一義的な勝義の対象

森山 [1991a] は、第一義的な勝義を対象側のみに位置付け、Karmadhāraya 解釈と Tatpuruṣa 解釈を分けて説明するので、「法無我と人無我という特徴を本質とする真実」(以下《二無我の真実》と略)を Karmadhāraya 解釈のみに結び付けるように思われる¹⁾。以下では、Karmadhāraya 解釈で説明される勝義を(1)対象と(2)主体の両面から見直し、『中観明』における第一義的な勝義を再検討する。

まず、第一義的な勝義の対象について検討しよう。第一義的な勝義の対象である《二無我の真実》は以下のように説明される。

「法無我と人無我という特徴を本質とする真実」は、論理を伴うので、(a)「最高のもの」であり「対象」でもあるのがそれであって、そして障礙を断つことを求める者たちの障礙を断つために求められる対象なので、(b)無顛倒の「最高の」智の「対象」つまり対象領域であるから勝義と言われる²⁾。

この箇所では、《二無我の真実》を(a) Karmadhāraya 解釈と(b) Tatpuruṣa 解釈とを通して勝義であると説明する。そのことは以下の記述でも明らかである。

經典の意味は、すなわち、これは人無我と法無我を特徴とする真実であり、勝義の言葉で意図される。(b)それは「最高の」智の対象領域であるから、そして「人無我と法無我を特徴とする真実」自体は論理を伴うので、(a)「最高のもの」であるから³⁾。

「対象」(artha)が挙げられないが、「人無我と法無我を特徴とする真実」を(a) Karmadhāraya 解釈と(b) Tatpuruṣa 解釈で説明する箇所と考えられる⁴⁾。

以上のように、(1)『中観明』で《二無我の真実》という第一義的な勝義の対象を Karmadhāraya 解釈と Tatpuruṣa 解釈の両方で説明するのは明らかであろう。

4. 『中観明』における第一義的な勝義の主体

次に、第一義的な勝義の主体を検討しよう。まず出世間智について《二無我の真実》を勝義の複合語解釈で説明した後に以下のように説明する。

それ(《二無我の真実》)を対象領域とする出世間智も、言葉の意味を他方「つまり把握する側」に適用するという観点から、それ(勝義)と言語表現する⁵⁾。

この箇所では、《二無我の真実》を対象領域とする出世間智も勝義とする。その理由として、勝義を把握する智も勝義と言語表現できることを挙げる。

次に、出世間智に関して以下のように説明する。

一切の戲論を離れ、すべての法が顕現することではなく、真実の対象を修習するという究

(128) 『中観明』における Karmadhāraya 解釈の勝義の位置付け (林)

極から生起した瑜伽行者たちの勝れた出世間智によって真実を悟って、化作されたもののように言説において一切のものは存在するので、存在の類は、一切智者などの設定の通りに破壊しないが、勝義においてではない⁶⁾。

この箇所では、真実を対象とする出世間智が一切の戲論を離れているとする。さらに、出世間智を仏、菩薩と声聞、独覚の出世間智とに分けて説明する。

また、声聞、独覚の対象領域である存在の独自相に関して、愚か者たちが恐れる状態を完全に断つためだけに、聖者の知の対象領域は実在であるとお説きになったけれども、仏、菩薩の真の出世間智の対象領域である勝義的なものの存在の独自相は存在しない。その対象は、一切法がまさに不生であることや不滅であることなどによって、存在や非存在のあり方を離れるから⁷⁾。

また、勝義と出世間智の関係について以下のように指摘する。

それ（「真実を特徴とする勝義」）も、全ての分別の網を離れ、一切法が顕現しない勝れた出世間智によって認識することなく、個々に知られるべきものであるが、認識してではない。すなわち「天子よ、勝義諦は、およそ一切の形相のうちで最上のものを伴う一切智者の智の対象領域をも超える。」とお説きになったようにである⁸⁾。

ここでは、出世間智は「真実を特徴とする勝義」を認識しないとし、その教証で勝義諦が一切智者の智の対象領域を超えているとする。

以上から、(2.1)《二無我の真実》を対象とする仏、菩薩の出世間智は第一義的な勝義であり、一切智者の智もそれに相当する智であることが分かる。

さらに勝義を対象とするものに「瑜伽行者の直接知覚」が挙げられる。

世尊たちの直接知覚こそが、一切の種類の真実を対象領域とするから、実際に、それはまさに欺きがないので、一切の種類の真実に関して迷乱しない⁹⁾。

ここでは、(2.1) 世尊たちの直接知覚が第一義的な勝義を対象領域とすると説明する¹⁰⁾。さらに『中観明』では、異教徒の者たちの顛倒した正しい認識手段と仏教における正しい認識手段との関係を語る際に以下のように言及する。

それ故に、賢者たちは、それ（顛倒した正しい認識手段）を否定してから、人無我と法無我との真実に悟入するのにふさわしく、業と結果の関係などの世俗的なものを設定する確立根拠である直接知覚などの正しい認識手段の定義を清らかであると「設定」なさる。…それ故に、私たちは正しい認識手段の定義が清浄であり勝義に相応することであると必ず認める¹¹⁾。

ここでは、人無我と法無我との真実に悟入するのにふさわしい正しい認識手段が第二義的な勝義とされる¹²⁾。この正しい認識手段は真実に悟入するのに必要

であり、悟入し終わった後のものは考慮されていない。したがって、(2.2) 世尊たちの直接知覚は、第二義的な勝義の正しい認識手段ではないと考えられる。

5. 結論

以上で Karmadhāraya 解釈で説明される「勝義」の位置付けから『中観明』における第一義的な勝義を再検討した。その結果、対象側に関して、(1) 《二無我の真実》は Karmadhāraya 解釈と Tatpuruṣa 解釈で説明され、また主体側に関して、(2.1) 仏、菩薩の出世間智と一切智者の智と世尊たちの直接知覚が第一義的な勝義であり、(2.2) 第二義的な勝義ではないことが明らかになった。

1) 森山 [1991a: 9-12, 18] を見る限りは、《二無我の真実》を Karmadhāraya 解釈の勝義のみに関連付けているように思われる。 2) MA, D 233b2-3, P 260b3-5. この箇所『中観明』「前主張」を、早島 [2013: 54.6-20] は勝義を Karmadhāraya 解釈と Tatpuruṣa 解釈する箇所とする。 3) MA, D 159b2-3, P 173b5-6. 4) 森山 [1991a] でのこの箇所の位置付けは明確でないが、Karmadhāraya 解釈と Tatpuruṣa 解釈する箇所を分けて記述していることから、少なくとも勝義を複合語解釈する箇所として考えていると思われる。 5) MA, D 233b3, P 260b5-6. 6) MA, D 223b7-224a1, P 248a8-b2. 7) MA, D 163a4-b1, P 177b5-178a1. 8) MA, D 233b5-6, P 260b8-261a2. 9) MA, D 179b2-3, P 196a7. 10) 森山 [1990] [1991b] は、瑜伽行者の直接知覚の主体を世尊、菩薩、声聞の三種に分ける。しかし『中観明』で、直接知覚は「声聞などの瑜伽行者の直接知覚」「世尊たちの直接知覚」と記述される。出世間智の主体を考慮すると、直接知覚も「声聞など」は「声聞、独覚」, 「世尊たち」は「仏、菩薩」と考えうる。 11) MA, D 179a1-2, P 195b5-7. 12) カマラシーラの著作で人法二無我を理解することで初地に入るとするため、初地に入った時点で人無我と法無我との真実に悟入し終わっている。

〈略号・使用テキスト・参考文献〉 D: sDe dge edition of the Tibetan Tripiṭaka. MA: *Madhyamakāloka* of Kamalaśīla, D (no.3887) *sa* 133b4-244a7, P [101] (no.5287) *sa* 143b2-275a4. P: Peking edition of the Tibetan Tripiṭaka. 早島慧 [2013]: 「複合語解釈から見た「勝義」(paramārtha)」『龍谷大学仏教学研究室年報』17, pp. 42-27. 森山清徹 [1990]: 「後期中観派の二諦説と pramāṇa」『印度学仏教学研究』39-1, pp. 446-441. 森山清徹 [1991a]: 「後期中観派の「勝義」の解釈とプラマーナ論」『仏法と教育の森 久下陸先生頌寿記念』, 佛教大学, pp. 1-19. 森山清徹 [1991b]: 「Madhyamakāloka の直接知覚論と二諦説」『仏教論叢』35, pp. 1-9.

〈キーワード〉 カマラシーラ, Karmadhāraya 解釈, 勝義, 『中観明』

(京都大学大学院)